

# 十九世紀ウィーンにおける市民祝祭

## — 皇帝フランツ・ヨーゼフ銀婚式 祝祭行列を中心に —

山之内 克子

### 1. はじめに — 市民史研究と「祝祭」 —

ミハイール・バフチーン(Michail Bachtin)は、フランソワ・ラブレー(François Rabelais)の作品を中心に中世からルネサンスにかけての民衆文化を扱った論文の冒頭で、「すべての祝祭は、人類文化の極めて重要な第一次的形式である」と述べて<sup>(1)</sup>、「祝祭」の文化的、社会的重要性を改めて強調した。祝祭は、十八世紀の啓蒙思想家以来<sup>(2)</sup>、哲学から宗教学、民俗学から社会学まで、人間社会の本質を明らかにしようとするすべての学問研究の対象として扱われてきた。「祝祭」という現象が、地域や時代を超えて、権力構造、コミュニケーションの手段と形式、さらには世界観に至るまで、それを執り行う社会のあらゆるメッセージを秘めているからである。

歴史研究のなかでは、とりわけ、アナル学派が「時系列史」や「心性史」の新概念によって伝統的歴史学を切り崩し、「歴史人類学」という方法論的刷新を突きつけたとき、「祝祭」は「新しい歴史」の中心的テーマとして脚光を浴びるようになった<sup>(3)</sup>。公文書など「書かれた歴史」が決して語りえない、民衆、あるいは社会全体の心性や日常を復元しようとする歴史家に、集団的行為としての祝祭は、多くの可能性を提供したのである。

ユルゲン・コッカ(Jürgen Kocka)やローター・ガル(Lothar Gall)ら、ドイツの歴史家によって進められてきた近代市民階層の研究においても<sup>(4)</sup>、「祝祭」は、やはり、市民の日常や心性についての議論とともに注目を集

めるようになった。十九世紀を席卷した近代市民階層とは、コッカが指摘するように、マルクスやウェーバーの階級概念によってはもはや把握しえない、まったく新しいタイプの社会グループであった<sup>(5)</sup>。すなわち、ここで個々の構成員を一つの社会階層として強く結束させていたのは、職業や出自、法的権利、収入形態など既成の概念ではなく、共通の価値体系や行動・思考様式にほかならなかったのである。このような社会グループの本質に迫るためには、政治・経済史的なアプローチよりも、むしろ、かれら独自の価値観や文化的コードに目を向けた精神史的、日常史的切り口が有効であることは、改めて指摘するまでもない。

マンフレート・ヘトリング(Manfred Hettling)とパウル・ノルテ(Paul Nolte)は、近代市民研究における「祝祭」の意義について、まず、以上のような市民階層の特質を強調したうえで、次のように述べている。「近代市民のような、共通の文化的コードにその存在意義をもつ社会グループを理解するためには、かれらに固有の「象徴的行動様式」(たとえば、コミュニケーション、シンボル、儀式、世界観など)が極めて有効な手がかりとなる。」これらの行動様式は、ヘトリング＝ノルテによれば、「著しく主観的な性質を持つものである一方、個人間の関係に社会的意味付けを行い、支配・従属関係を成立させ、それによって重要な政治力としても作用しうるファクターである。」<sup>(6)</sup>そして、「祝祭」とは、まさに、このような「象徴的行動様式」の結晶とみなしうるものなのである。したがって、「祝祭」を、近代市民の集団的行為・集団的体験として再構築することは、必然的に、市民という、ある意味で極めて把握し難い社会グループの精神世界を復元し、そこにかれらの社会的・政治的自己表現、自己理解を読み取ることへとつながるのである。

本稿では、このヘトリング＝ノルテの理論的枠組みを念頭に、まず、市民史、とりわけその祝祭に関する先行研究の成果を前提として、十九世紀の市民祝祭の中にドイツ市民の精神性、特にかれらのドイツ民族主義を確認する。そのうえで、国家単位として、また、文化圏としての「ドイツ」にたいして常に微妙な立場にあったハプスブルク帝国、なかんずくその首都ウィーンをとりあげ、多民族国家におけるナショナリズムの特殊性が帝

国首都の市民祝祭においていかなる形で現われたのか、また、しばしば「政治的アクション」としての側面が強調される市民祝祭において、その最も根源的な部分を支えた「象徴的行動様式」の特色を、ここにいかなる形で読み取ることができるか等の問題について検討したい。

## 2. 市民祝祭とドイツ・ナショナリズム

クラウス・テンフェルデ(Klaus Tenfelde)は、その祝祭に関する一連の研究<sup>(7)</sup>のなかで、ドイツにおける祝祭、とりわけ祝祭行列の起源を、アドベント(Adventus)に求めている。アドベントとは、皇帝や支配者の都市への入城の儀式を指し、その原形は古代ローマや新約聖書の中にもすでに見い出されるが<sup>(8)</sup>、ここで特に問題となるのは、774年ならびに800年のカール大帝のローマ入城である<sup>(9)</sup>。この二度の凱旋入城によって、教皇はじめ高位聖職者、そして市長をはじめ都市の名士たちという、聖俗両界の代表者たちが都市の外側で皇帝を迎え、彼に付き添う形で市内へ行進するという、アドベントの基本的な形式が定まったのである。

アドベントは、皇帝による帝国直属都市の巡幸が習慣化するにつれて、やがて、神聖ローマ帝国の伝統儀式として定着していった。ここで、皇帝の側も、彼を迎える都市の側も、カール大帝の入城儀式を細部に至るまで忠実に再現し、それによって、皇帝・都市相互の明確な権利確認を象徴しようとしたのである。

ところが、このアドベントの伝統は、十五世紀以降、神聖ローマ帝国で皇帝権力が次第に弱体化し、さらに1806年、ナポレオン戦争の結果、ついに帝国自体が解体した後も、決して失われることはなかった。十九世紀、皇帝や諸侯に代わって社会的影響力を手にしつつあった近代市民階層が、この「皇帝の儀式」の形式を「市民の祝典」のために借用したからである。ここで特に注意すべきことは、市民たちが、アドベントが含むさまざまなシンボルを、巧みに「読み替え」たことである。すなわち、かれらは、もともと封建主義的、教権的な意味をもっていた儀式の細部を、たとえば中世の都市自治、あるいは市民的自由の象徴として解釈しなおした<sup>(10)</sup>。

とりわけ、ナポレオン戦争後、ナショナリズムの高まりとともに、旧神聖ローマ帝国をドイツ帝国として再び統一しようという気運が盛り上がったとき、アドベントは、市民たちの民族意識のなかで、統一ドイツの起源、あるいはドイツ民族の黄金時代の象徴として、新たな意味を与えられた。解放戦争後の1814年から1870年代にかけて、ドイツ諸都市では、ドイツの民族性を賛美し、人々の民族意識を高揚する祝典が年間の祝祭日表を埋め尽くしていた<sup>(11)</sup>。特に、市民たちのクラブや結社<sup>(12)</sup>、そのなかでも民族主義的な色彩の強かった男声合唱協会や体操・射撃クラブの祝祭では、旗や紋章を掲げた都市入城行進から楽隊による演奏まで、アドベントの細部が残らず再現された。また、1859年には、旧帝国領内400以上の都市で、ドイツの国民的作家、フリードリヒ・シラー(Friedrich Schiller)の生誕100年祭が民族主義的熱狂の中に祝われた。これらの「シラー祭」においても、ほとんど例外なく、アドベントの伝統に則った祝典行列が行われたという<sup>(13)</sup>。

十九世紀におけるこのアドベントの細部とシンボルの「読み替え」を理解するための重要なヒントを与えてくれるのが、ヘトリング＝ノルテの市民祝祭に関する議論である。かれらによれば、まず、祝祭とは、それを執り行う社会の自己表現、あるいは情緒的な自己確認として定義しうる。しかし、注意すべきことは、十九世紀に、祝祭の機能が、社会の現実を誇示、表現することから、やがて、社会のイデオロギー的信条や理想を表現することへと大きく変化したことだ、とかれらは指摘する<sup>(14)</sup>。

すなわち、中世において、アドベントの主催者(皇帝、教会、都市)が、その儀式を通じて、当時の現実の社会において一義的な意味を持っていたそれぞれの権力や利権を確認したのにたいし、十九世紀、ドイツ諸邦の市民たちは、祝祭において、まさに、ゲルマン精神文化の黄金時代としての中世を賛美しつつ、ドイツ民族の国家的統一というひとつの政治的理想を謳い上げようとした。アドベントという儀式の細部も、ここで、祝祭の現実から、イデオロギー表現のためのシンボル、記号へと確実にその機能を変化させたのである。

こうして、十九世紀における祝祭の社会的機能の大きな変化のなかで、

アドベントの伝統は、「ドイツ民族の祭典」へと姿を変えて、市民社会の日常の中に根付いていった。そして、テンフェルデが指摘するように、この「民族の祭典」のクライマックスと呼びうるのが、1871年、対フランス戦争で勝利をおさめることによって、ドイツ帝国建国を実現した皇帝ヴィルヘルム一世の、首都ベルリン凱旋パレードにほかならなかった<sup>(15)</sup>。

このように、ドイツにおける「祝祭史」は、大まかに捉えて、八世紀のアドベントが少しずつその形を変えながら十九世紀の「民族の祭典」へと引き継がれていくという、直線的な過程のなかで理解することができる<sup>(16)</sup>。しかし、この極めて明快な祝祭文化の流れは、果たして旧神聖ローマ帝国領の全地域にみられるものなのだろうか。とりわけ、ナポレオン戦争後、ドイツ諸邦とは全く別の道を歩むことになった、ハプスブルク帝国では、どうだったのか。

1848年革命の後、新絶対主義から自由主義へと揺れ動いた帝国政治史の流れの中で、オーストリアを主体として旧神聖ローマ帝国のほぼ全領土を統合しようとする大ドイツ主義は、多くの閣僚や政策担当者によって支持され、喧伝された。これを受けて、実際には非ドイツ系住民がその人口の大多数を占めていたにもかかわらず、ハプスブルク帝国でも、オーストリア地域を中心に、1860年代まではドイツ民族主義が強い盛り上がりを見せていた。

そして、これを反映して、オーストリア諸都市の祝祭事情もまた、ドイツの都市と全く変わるところがなかった。ウィーンでもザルツブルクでも、十九世紀の半ばには、ドイツ民族主義に彩られた狩猟協会や体操クラブの祝祭が年中行事として定着していた<sup>(17)</sup>。また、「シラー祭」は、ウィーンをはじめ多くの都市で盛大に祝われ、数多くのシラー記念碑が作られた<sup>(18)</sup>。

しかし、1866年、プロイセンとの戦争に帝国軍が大敗し、さらに、1871年、プロイセンがオーストリアを排除する形でドイツ帝国を樹立したとき、これらの状況は一変した。ここで、ハプスブルク帝国も、またその首都ウィーンの市民たちも、これまで信奉してきたドイツ・ナショナリズムとゲルマン文化の中に、もはや自らのアイデンティティを求め得なくなったのである。帝国各地でスラヴ系諸民族の民族運動が活発になるなかで、神聖ロー

マ帝国の伝統を裏付けるべき「ドイツ」というアイデンティティから切り離されてしまったことは、ハプスブルク帝国における民族意識の問題を、ますます複雑化させた。

そして、このことは当然、首都ウィーンをはじめ、各地の祝祭にも直接的な影響を与えた。オーストリア地域でそれまで盛んに行われていたドイツ民族主義的祝祭は、1866年を境に極端に減少したのである<sup>(19)</sup>。

しかし、この「ドイツ民族の祭典」の減少は、ハプスブルク帝国における祝祭文化の衰微を意味するものでは決してなかった。たとえば、ウィーンでは、規模の上でも頻度の点でも、都市の祝祭がその最盛期を迎えたのは、むしろ1880年代以降であったという<sup>(20)</sup>。大ドイツ主義が挫け、もはや「ドイツ」というアイデンティティを主張することができなくなった時代に、ハプスブルク帝国、とりわけその首都ウィーンの市民たちの祝祭はどのように変化したのか。そのときかれらは、ドイツ民族主義に代わって一体何を誇示しようとしたのか。

ノルテらが定義するように、祝祭が社会の自己表現であり、自己確認の手段であるとするなら、1866年以降、首都で執り行われた祝祭を分析することは、ウィーンという「多民族都市」のナショナリティの特殊性という限定された問題にとどまらず、この都市の精神性の本質にまで迫るための糸口となるのではないか。

以下では、これらの問題にアプローチするための具体的事例として、十九世紀ウィーン最大の祝祭となった1879年の皇帝フランツ・ヨーゼフ銀婚式祝典、とりわけその祝祭行列をとりあげたい。これまでみてきた「アドベントから『民族の祭典』へ」という移行を旧神聖ローマ帝国領における祝祭の類型とみなし、この類型との比較において、1879年の祝祭の一般性と特殊性を明らかにしていくことが、当時のウィーンの世界そのものを理解するための重要な手掛かりとなると考えるからである。

### 3. 皇帝フランツ・ヨーゼフ銀婚式祝祭行列

#### (1) モティヴェーション — フランツ・ヨーゼフと首都市民の愛国心

1848年、ウィーン三月革命の収拾とともに弱冠十八歳で即位したフランツ・ヨーゼフ帝は、1854年4月24日、バイエルン公女エリーザベトと結婚した。そして、二十五年後の1879年、皇帝夫妻は銀婚式を迎えることになっていた。

この記念すべき日のために、すでに数年前から、ウィーンにとどまらず帝国各地でさまざまな記念祝典が計画された。しかし、皇帝は、自身の私的な記念日のために国民が多大な犠牲を払うことを望まなかった<sup>(21)</sup>。特に、1878年の早春、ハンガリー南部を襲った大洪水が都市セゲドに甚大な被害を及ぼしたとき、フランツ・ヨーゼフは、ハンガリー地域で祝典のために準備されていたすべての基金を、被災地での救援活動に当てるよう命じたのである<sup>(22)</sup>。

しかし、首都ウィーンでは、市議会の強い希望もあって、市当局が皇帝夫妻に献呈する祝祭行列だけは、「(こうした芸術的なパレードの実現が)帝国の芸術と工芸を促進することになる<sup>(23)</sup>」という理由で、特別に認められた。

この承認を受けて、ウィーン市議会では、1878年12月10日、祝祭行列の実行を確認した。このときウィーン市長ユリウス・ネヴァルト (Julius Newald) が行った演説は、皇帝フランツ・ヨーゼフが首都市民の心情のなかでどのように捉えられていたかを明らかにすると同時に、この祝祭そのものの本質にも触れているという点で、極めて重要なものである。市議会のメンバーを前にして、ネヴァルトは、次のように語った。「来る4月24日、皇帝ご夫妻は銀婚式を迎えられます。これは、帝室のご一族にとってばかりでなく、すべての帝国国民にとって、そしてとりわけ帝国首都にして宮廷所在地であるこのウィーンの市民にとって喜ばしい祝日にほかならないのです。想えば、25年前、ご結婚のお祝いの日からこのかた、首都ウィーンはかつてない繁栄の日々を体験してまいりました。そして、この進歩と発展の一つ一つの段階は、いうまでもなく、すべて、ご夫妻の御名前と結

び付いているのです。首都ウィーンは、まさに、皇帝の庇護のもとにその市民的自律性の自由な発展を実現したのであり、また、われわれ市民の胸中には、都市の諸制度や権利に対する保護も、市民の福利の促進も、すべてハプスブルクの王冠のもとになされ続けるのだという確信が満ち溢れているのであります<sup>(24)</sup>。」

この市長演説のなかには、ウィーン市民の皇帝フランツ・ヨーゼフに対する篤い敬慕の念を明確に読み取ることができる。一国の統治者としてみれば、フランツ・ヨーゼフは決して有能な君主ではなかった。ハプスブルク帝国の国力低下のなかで、かれの空しい自尊心と決断力の欠如が、帝国をますます危機的な状況に陥れたことは、政治史が教えるところである。しかし、それにも拘わらず、フランツ・ヨーゼフは、ハプスブルク家の歴代の宗主のなかでも、おそらく最も強く国民の、そして首都市民の心を捉えた皇帝であった。

フランツ・ヨーゼフが持っていたこの二元性について、十九世紀ウィーンの文筆家、アルフレート・ベルガー(Alfred Frh. v. Berger)は、国家権力としての皇帝と、国民の心情の中の皇帝とを区別した上で、次のように指摘した。「政治的合理主義のいかなる組織的な試みも、国民のファンタジーによって創造され、その心情によって魂を吹き込まれた、人々の心の中の『われわれの皇帝』という表象を、根こそぎにすることはできなかった<sup>(25)</sup>。」すなわち、フランツ・ヨーゼフという君主においては、国民の心情の中に形成された、親しみ深い、時としてロマンティックな表象が、現実の国家権力としての「皇帝」をはるかに凌ぐ力を持っていたのである。同時代の作家、ローベルト・ムジル(Robert Musil)がその『特性のない男』のなかで描く皇帝像は、まさにこうした状況の中で生み出されたものであった<sup>(26)</sup>。

とりわけ、フランツ・ヨーゼフが首都の市民たちの間で絶大な人気を博していた事実は、皇帝の80歳の誕生日を記念してウィーン市当局が編纂した演説集の序文のなかで、かれがまさにウィーン市民たちの「父親」と呼ばれ、また、「皇帝とウィーン市民は、いうなれば、ひとつの家族のようなものだ!<sup>(27)</sup>」と表現されていることにも、明確に現われている。特に、



1857年に開始され、その後の首都の画期的な好景気を支えることになったウィーン市都市拡張計画において、皇帝がまさに施主としての役割を担った事実は<sup>(28)</sup>、都市のブルジョアジーの間に「ウィーンの近代的発展の指導者」というイメージを形成することになった。

そして、前述の市長演説のなかに鮮明に読み取れるものは、こうしたイメージにほかならない。すなわち、1879年の祝祭行列は、明らかに、「われわれの皇帝」という、首都の市民たちの親しみのこもった感情、そしてまた、人々の「父」としての、あるいは都市発展の指導者としての皇帝に対する忠誠心に発したものだだったのである。

このように、祝祭のモチベーションに関していうなら、この祝祭行列は、ドイツの諸都市で依然として盛り上がりを見せていた「民族の祭典」と、極めて近い位置にあったとすることができるだろう。すなわち、ドイツにおけると同様、ハプスブルク帝国においても、祝祭行列というアドベントの伝統は、概ね、愛国主義的精神との関わりの中で、市民階層に引き継がれていったのである。ただ、ウィーンについて特徴的なことは、ドイツ・ナショナリズムという方向性を持続しえなくなった首都市民の愛国心が、ここで、民族主義ではなく、むしろ、皇家への篤い忠誠心という形をとって表われたという事実である。

こうした愛国心の表われ方には、十九世紀末葉、ハプスブルク帝国の社会状況のなかに首都市民が占めた位置が密接に関係していた。当時、スラヴ系諸民族の独立運動、反ユダヤ主義、また、キリスト教社会党や社会民主党が主導する大衆運動などの様々な遠心的要因が、ハプスブルク帝国を内側から蝕み、確実に解体へと駆り立てていた。そのなかで、ハプスブルク王朝の伝統の重み、そして、年齢を重ねるとともにやがて帝国そのものの「象徴」と見られるようになったフランツ・ヨーゼフの存在だけが、これらの分裂的諸力を敢えて抑止し、諸邦と五千万の国民を相互に結び付けて、ようやく帝国の命脈を保つ、唯一の求心力として作用していたのである<sup>(29)</sup>。

そして、首都ウィーンの市民階層とは、豊かな資源と労働力、そして肥沃な農地と有力な工業地帯を強力に支配する、大ハプスブルク帝国という

国家形態から、最大の利益を引き出していた社会グループであった。十八世紀以降、ウィーンでみられた市民階層のめざましい経済的、社会的上昇は、まさにハプスブルク帝国そのものによって支えられていたのである<sup>(30)</sup>。また、首都の資本家グループのなかで重要な役割を果たしていたユダヤ系市民にとっては、ハプスブルク王朝の存在だけが、反ユダヤ主義を封じ込める力を持っていた。

この意味で、首都の市民階層とハプスブルク帝国は、密接な相互依存関係にあったといえる。王朝にたいして、市民たちが時として貴族よりも強い忠誠心を見せた理由も、ここにあったのである。

プロイセンがドイツ統一を達成した後、ハプスブルク帝国においては、ドイツ民族主義はもはや愛国主義とはみなされ得なくなった。帝国を支えるのはただハプスブルク家の存在だけであり、帝国の存在を肯定する人々にとって、愛国心とは、皇家にたいする忠誠心と同義に解釈されるようになった。そして、ドイツ帝国建国以来、ウィーンの祝祭文化が体験した変化こそは、まさに、人々の愛国精神のこの変質を反映していたのである。

その後数ヶ月にわたって首都の社会に一種の多幸状態をもたらし、帝国全体の祝祭文化に大きな影響を与えたといわれる1879年の祝祭行列は、このような精神的変化を最も典型的に表わす事例としてみることができる。

## (2) ウィーン市歴史行列<sup>(31)</sup>

祝祭行列の実行が市議会で確認された後、1878年12月27日、市会議員の代表からなる祝祭専門委員会が発足した<sup>(32)</sup>。

このとき、人々が、倣うべき前例として、例えば、1877年のウルム聖堂百年祭や、1878年のライプツィヒにおけるザクセン王夫妻の銀婚式の祝祭行列などを想起したことは確実である<sup>(33)</sup>。しかし、委員会で主導的役割を果たした市会議員、ヴィルヘルム・ヴィーナー (Wilhelm Wiener) が強く主張したように、関係者の間には、当初より、このパレードを、従来のカーニヴァル的な仮装行列や松明行列などとは全く異質の、皇帝に献呈するにふさわしい、芸術的かつモニュメンタルなものに仕上げようという意図があった<sup>(34)</sup>。

祝祭委員会は、1879年2月1日までに、パレードの進路や、皇帝夫妻が行列を謁するための仮設テントの設置場所など、祝祭行列に関する大枠を決定した<sup>(35)</sup>。ところが、行列の内容については、「皇帝に対する全国民からの表敬」という基本コンセプトを明らかにするために、さまざまな団体、結社、職業組合をこの行列に参加させることや、また、学問と芸術、そして、あらゆる産業部門を歴史的・寓意的方法を用いて表現することなどが確認されたにすぎなかった<sup>(36)</sup>。行列の具体的な計画に着手するためには、専門家の手を借りることが不可欠の条件だったのである。そのため、委員会は、すでに、ウィーン芸術家協会にたいして、数名の代表を委員会に参加させるよう要請していた<sup>(37)</sup>。

委員会の漠然としたアイデアから、ヴィーナーが切望した、かつてないほどのスケールと芸術性、そしてモニュメンタリティを誇る祝祭行列のプランを具体化することに成功したのが、当時、ウィーン随一の人気を誇った歴史画家、ハンス・マカルト(Hans Makart)であった。芸術家協会から派遣された五名の代表のなかで<sup>(38)</sup>、行列全体のデザインと演出を担当することになったマカルトは、参加を希望するクラブや結社、職業組合ごとに次々とデザインをまとめ、早くも2月25日には、二十以上の参加グループのスケッチが芸術家協会において一般公開された。これらのスケッチは、すでに、このパレードが稀にみるスケールのものとなることを人々に十分予想させるものであったという<sup>(39)</sup>。

マカルトとの協議の結果、祝祭委員会は、仮装した市民による「歴史行列」を中心に、パレード全体の構成を決めた。このうち、パレード全体のメイン部分を占めた「歴史行列」とは、職種ごとに34のグループに別れて歴史的な装束に身を包んだ市民たちが、各々の職業を表わすさまざまな象徴的、寓意的な大道具・小道具とともに行進するというものであった。マカルトは、まず、ここで、個々のグループが不統一な印象を与えるのを避けるために、すべての職業グループに、それぞれ十六世紀の同業者組合のユニフォームを振りあてた。このドイツ・ルネサンス時代の装束は、「市民文化の繁栄」を象徴するという意図で選択されたものであった<sup>(40)</sup>。

さらに、各グループのデザインにおいて、マカルトは、歴史画家として

の知識と才能を最大限に発揮した。行列を華やかに彩った山車や彫像から小道具類に至るまで、すべてがそれぞれの職業グループを表わすシンボルとして機能していた。ここでは、代表的な職業グループとして、次の三例についてその詳細を述べておく<sup>(41)</sup>。

(a) 繊維工業者のグループ

巨大な糸巻車や紡棒を掲げた人々に囲まれた山車は贅沢なルネサンス風の織物で豪華に飾られ、その上段では織機の前に座った親方が一心に機を織っている。

(b) 商人のグループ

山車の先頭に地球儀と商業の守護神マーキュリーの像がしつらえられ、それを錨、オール、黄金の溢れ出る豊穰の角、荷台に高く積まれた木箱や樽が囲む。その傍らに座る二人の少女はそれぞれ「売り」と「買い」の行為を象徴する。山車とともに歩むのは、アジアやエジプトの衣装をまとった人々で、各々が、これらの国々の特産物を手にしている。これらは、七つの海に渡り、世界の豊かな商品を売買する商人の生業を象徴する。

(c) 鉄道業者のグループ

赤と黒で特別にデザインされたルネサンス風ユニフォームに身を包んだ人々が先導する山車は火の神の戦車を象ったもの。先頭には鉄道を象徴する「羽根の生えた鉄の車輪」（これは速度のシンボルでもある）を戴き、それを「地獄の犬」の頭部や妖女の彫像が囲む。燭台に支えられた炉からは石炭が煙をたて、その後ろには「火の神」と「水の女神」との結婚を描いた彫像が置かれている（蒸気機関を象徴）。山車の上には、帝国の六つの邦土、オーストリア、ボヘミア、モラビア、ポロニア、シレジア、ステイリアを象徴する六人の女性が座る。

ここで見逃してならないことは、この祝祭行列において、歴史的なシンボルやアレゴリーが何よりも重要な役割を果たしていた事実である。すなわち、この行列のデザイン、演出全体を通じて、マカルトは、「現在」に関する概念を表現するために過去を引用し、あるいは、過去の断片を「現在」を表現するための「記号」として用いるという手法に訴えた。例えば、

十六世紀という時代のイメージによって「市民文化の繁栄」という理想を描き、また、「鉄道」という極めて現代的な概念にすら、さまざまな歴史的シンボルを当てはめていったのである。

これは、まさに、あくまで過去との密接な関わりのなかで現在を読み解こうとする志向の現われにほかならなかった。

そのスケールと最大の視覚的効果によって人々を魅了し、後世に語り継がれることになった「歴史行列」を貫いた、こうしたスタンスの背後には、どのような精神性が横たわっていたのだろうか。このような問題の解決の糸口を見い出すためには、画家マカルトについていま一度詳しくみていく必要がある。

### (3) 祝祭行列と市民文化における歴史主義

1869年、ハプスブルク家の宮内長官の推薦を受けたハンス・マカルトは、皇帝フランツ・ヨーゼフ直々の招きによってウィーンに居を定めることになった。画家は、その後、色彩豊かな歴史画や寓意画によって大人気を博し、その画風は当時のインテリアやモードにまで影響を与えたといわれる<sup>(42)</sup>。

とりわけ、1879年の祝祭行列に関連して重要な位置を占めることになるのが、マカルトが主催した「アトリエ・フェスト」と呼ばれる祝宴であった。マカルトは、自らのアトリエを単なる仕事場とはみなさなかった。かれにとってのアトリエとは、自身の美的感覚のおもむくままに、自分だけの「美的世界」を構築すべき場にほかならなかった。こうして、グスハウス街のマカルトのアトリエは、東洋風の織物、中世の武器、ルネサンス風の家具など、かれの絵画作品に欠かせない様々な小道具によって、まるでその歴史画さながらに豪華に装飾されたのである<sup>(43)</sup>。

アトリエの素晴しさが評判になると、マカルトは、1871年、これを一般に公開し、さらに1873年ごろから、ここに芸術家や名士を招いては祝宴を開くようになった。これが、「アトリエ・フェスト」である。

この「アトリエ・フェスト」は、毎回何らかのテーマを持っていた。すなわち、マカルトがその都度、ルネサンス風、バロック風などのテーマを

提示し、招待客はそれに合わせてさまざまな歴史装束を調達してはアトリエを訪れた。たとえば、1875年、ウィーンを訪れたリヒャルト・ワーグナー (Richard Wagner) を歓迎するために画家が計画した「ワーグナー・フェスト」では、ワーグナーの楽劇に因んで、中世風のコスチュームが求められたのである<sup>(44)</sup>。歴史的なコスチュームに身を包んで、やはり歴史的様式の小道具で飾られたアトリエに遊ぶ趣向は、当時の人々の心を強くとらえた。「アトリエ・フェスト」は、ウィーンで大流行した。

皇帝フランツ・ヨーゼフ銀婚式祝祭行列の制作をマカルトの手に委ねたとき、このパレードに類稀な芸術性とモニュメンタリティを付与しようと望んだ人々がこの「アトリエ・フェスト」を念頭に置いていたことに、疑問の余地はない。そして、事実、マカルトは、これまで画家のアトリエというごく私的な空間で展開してきた「アトリエ・フェスト」を、そのまま都市という公的なフィールドで展開させることによって、人々の期待に応えたのである。このことは、鉄道などという、ツンフト的伝統をまったく持たない業種にすら、いかにも十六世紀風のシンボルを難無く取りそろえて見せる、マカルトという一人の芸術家の感性と手法が、当時の社会の趣味や精神性にいかにぴったりと合致していたかを裏付けるのである。

すなわち、すべてを過去との関わりにおいて把握しようとし、シンボルや寓意を重要視するスタンスは、マカルトだけに限られるものではなく、当時の芸術、文化に共通する精神的志向であった。たとえば、この時代の建築様式の中にも、こうした傾向がはっきりと表われている。1857年に開始された都市拡張計画は、ウィーンに未曾有の建築ブームをもたらし、特に、新市街区リングシュトラッセでは、多くの豪華な公共建造物やアパートメントハウスが建設された。ここで特徴的なことは、これらの建物が、たとえば、国会議事堂はギリシャ古典様式で、また、劇場はバロック様式で、というように、すべてが過去の様式の「引用」によって完成されたことである<sup>(45)</sup>。

建築史家、レナーテ・ワーグナー＝リーガー (Renate Wagner-Rieger) は、こうした一種の様式折衷について、これを、的確にも、「『歴史』」をその思考過程の中核に置く態度、すなわち、精神生活のほとんどの領域が

『歴史』によって貫かれていると考え、また、『歴史』を、実際上の生活の教師とまではいわないにしろ、概ね理論上の生活の教師とみなすような態度の、芸術的な現われである」と定義している<sup>(46)</sup>。

この指摘は、建築様式という狭い芸術分野に限定されるべきものでは決してない。マカルトの歴史画に陶醉し、皇帝フランツ・ヨーゼフの銀婚式祝祭行列に熱狂したウィーン社会の精神性の本質は、まさに、この建築史家の言葉によって言い尽くされている。たとえば、自らの肖像を後世に残そうとする当時の貴族やブルジョアジーは、残された絵画や写真作品が示すように、しばしば、現代的な正装姿ではなく、歴史的なコスチュームに身を包んでキャンバスやファインダーの前に立った。十九世紀末葉のウィーンには、まさに、歴史的装束で扮装することが日常的であるような社会が存在した。そして、過去のアレゴリーによって常に精神的刺激やさまざまなインスピレーションを与えられることを文化的な前提としているような社会は、マカルトがその「アトリエ・フェスト」、そして皇帝夫妻の銀婚式祝祭行列でデザインしたシンボルや寓意を、瞬時にして理解しうる能力を備えていたのである。1879年の祝祭行列は、まさに、このような特質をもった社会の自己表現として解釈することができる。

そして、あくまで過去の歴史との関わりにおいて現在を生きようとするこの精神的態度は、さらに、市民階層全般の文化的理想や心性との関連において理解されるべきものである。すなわち、ここで、十九世紀において、市民階層の文化、教養の基底が次第に人文主義から歴史主義へとシフトしていった事実が改めて指摘されなければならない<sup>(47)</sup>。この変化の過程で、これまで、幅広い教養の一部を形成するにすぎない一分野、もしくは、哲学や自然科学の理解を助けるための補助学問であった歴史学が、人間存在における最も重要なファクターとして認識されるようになったのである。

そして、ヴォルフガング・J・モムゼン(Wolfgang J. Mommsen)が述べたように、歴史の位置価値の急激な上昇は、特定の社会的・精神的状況によって惹起されたものにほかならない<sup>(48)</sup>。歴史主義を生み出したものは、まさに、当時の市民階層がおかれた特殊な状況であった。そしてそれは、なによりも、「歴史」にたいするかれらの二元的な関わり方によってはじ

めて説明し得るものである。

まず、市民たちの精神性の中核を形成した概念として、「進歩の観念」を指摘しなくてはならない。科学技術が目覚ましい発展をとげた十九世紀にあって、人類社会が常に進歩発展を遂げることを確信した市民たちは、自らを、「人類発展史の完成者」、かつ「未来の創造者」として認めていた<sup>(49)</sup>。とりわけ、かれらの「歴史の管理者」としての自意識は、すべてにおいて歴史を重視するスタンスを生みだした。十九世紀の祝祭文化において、しばしば、歴史的事件の記念祭（百年祭、二百年祭など）が祝われた事実も、このような精神性との関わりで認識されなければならない<sup>(50)</sup>。

しかし、他方、冒頭でも指摘したように、市民階層とは、多様な構成要素の総合体であり、文化的コードという曖昧な概念の中にその存在意義を求めざるを得ないという状況があった。十八世紀後半以降、新しい社会的、経済的エリートとして次第に台頭してきた市民階層は、貴族と比較して、社会階層としての伝統に欠けていた。それだけに、市民たちが文化的なレベルで自己表現を試みたとき、とりわけ、文化・芸術を通じて自らのステータスを誇示しようとしたとき、かれらは、しばしば過去の歴史の断片を借用し、歴史そのものの力を借りようとしたのである。このことが、後の文化史において、「芸術的伝統も独自性も持たなかったがゆえに、様式折衷と悪趣味に陥ったブルジョア文化」というイメージを定着させることになった<sup>(51)</sup>。しかし、歴史とのこの密接な関わり方そのものを、独自の文化的形態として扱う視点は、ほとんど顧みられることがなかった。

そして、ウィーンにおける祝祭行列、さらには、十九世紀後半にドイツ語圏でみられた多くの「歴史行列」は、歴史主義の文化を見直す視点を回復するための手がかりを与えてくれる。これらの事象は、「歴史」との繋がりを懸命に求め、その繋がりの中に独自の文化的価値を見い出そうとした市民階層の、最も典型的な公共性として理解すべきものだからである<sup>(52)</sup>。

十九世紀の市民祝祭は、しばしば、バロックやロココ時代の祝祭文化の名残として扱われてきた<sup>(53)</sup>。しかし、これを、古い伝統文化の最後の残り火と見なすのではなく、祝祭の新しい担い手としての市民階層、特にかれらの文化的、精神的志向との関連で考察することによってはじめて、十九



世紀の祝祭が、バロック時代と同様、当時の社会において、政治的、文化的、精神的に重要な意味を持っていたことが明らかになるであろう。

### 3. おわりに

ウィーン市民が皇帝フランツ・ヨーゼフと皇妃エリーザベトに捧げた銀婚式記念行列は、宮廷内の祝賀会や宮廷歌劇場での記念公演の後、1879年4月27日に行われた<sup>(54)</sup>。歴史的様式の建物が立ち並ぶ新市街区、リングシュトラーセを、マカルトが考案した豪華な山車を交えて、十六世紀風の衣装をまとった人々が行進するさまは、まるで一幅の歴史画を見るようであったという<sup>(55)</sup>。パレードは大成功に終わり、その評判は遠く新大陸にまで伝えられた<sup>(56)</sup>。

ここでは、このパレード、とりわけその「歴史行列」を、市民階層の自己表現としてとらえ、市民たちが、その愛国心、殊にハプスブルク家に対する忠誠心を、歴史主義的手法にしたがって、過去のさまざまなシンボル、アレゴリーを通じて表現したことを確認した。

しかし、一方、市民たちのここでの自己表現が、極めて自己完結的、閉鎖的なものであったことも、無視できない事実である。そして、このような自己表現は、社会の現実そのものを映し出すものでは決してない。実際、この歴史行列でマカルトがさまざまなシンボルを駆使して表現しようとした観念そのものが、多くは、当時の社会的現実との間にすでに大きな齟齬を来しつつあったのである。

たとえば、繊維工業者のグループで、マカルトは、豪華な山車の上に、巧みに機を織る親方と、その手元を熱心に見つめる徒弟たちを乗せて、師弟間の美しい協調関係を謳い上げた<sup>(57)</sup>。しかし、当時、すでに大量の未熟練工を動員した機械制大工業の時代を迎えた現実の世界では、労使の対立やプロレタリアートの問題が、ウィーンに限らず、ヨーロッパ全域で深刻化していたのである。十九世紀には、ツンフトの理想世界は、すでに過去の遺物となっていた。

また、鉄道業者や蒸気船会社のグループにおいては、帝国の諸邦が女性

の姿に擬人化され、これらの新しい交通機関によって、すべての邦土が美しく結び付けられ、統合される場面が描かれた<sup>(58)</sup>。しかし、1870年代にはすでに、各地でスラヴ系諸民族の民族運動が盛んになっており、これが、多民族国家であるハプスブルク帝国を解体する、遠心的な力として作用していた。諸邦がハプスブルクの王冠のもとに調和をみいだすような時代は過ぎ去っていたのである。

帝国各地での諸民族の独立運動ばかりではなかった。首都においてすら、社会主義の影響を受けた大衆政治運動が、ハプスブルク家の政治システムに疑問を投げかけていた。つまり、ここでわれわれは、市民たちがこの祝祭を通じて誇示しようとした、王冠と人民との幸福な調和そのものが、根本から揺らぎつつあった事実に向けなければならない。

すでに引用したように、ヘトリング＝ノルテは、十九世紀の祝祭が、社会の現実ではなく、社会全体の描く信条や理想を表現していたことを指摘した<sup>(59)</sup>。社会的現実に逆行して、過去のユートピアを描いたという点で、1879年の祝祭行列も、決してその例外ではなかった。では、マリア・テレジアの時代から継承されてきた、調和に満ちた「帝国世界」が崩壊していく一方、外交的、内政的危機、株価の大暴落、また、社会問題の深刻化など、ますます厳しさを増す現実の中で、首都の市民たちが、この祝祭行列において十六世紀の「古き良き時代」を演じたことには、いかなる意味があったのか。

祝祭の社会的機能については、これまで多くの社会史家、文化史家が仮説や結論を提示してきた。そのなかで、バフチーンやアナル学派のル＝ロワ＝ラデュリ (Le Roy Ladurie) は、祝祭の社会的安定剤、あるいは安全弁としての役割を強調している。たとえばカーニヴァルにみられる「無礼講」の習慣は、民衆の中に内在する反社会的なエネルギーに、定期的にはけ口を与えるという機能を負ったという<sup>(60)</sup>。

この論考との関連でいえば、1879年の祝祭行列は、まさに、過酷な現実世界を一時でも忘れようとする、市民たちの「美的世界への逃避」として理解することができるだろう。かれらはおそらく、ここで、一切の葛藤や対立のない、一種のユートピア絵図を求めたのである。ル＝ロワ＝ラデュ

りが扱った近世のカーニヴァルが、抑圧された破壊的エネルギーの安全弁であるなら、マカルトの祝祭は、不安に満ちた市民社会のなかで、一種の鎮静剤としての役割を担ったのである。いずれにしても、社会に内在するネガティブな力を静め、社会の安定を保持するという、社会史が確認した「祝祭の機能」は、十九世紀ウィーンにも十分適応しうるものであったろう。

さらに、この「現実逃避」の概念が、当時のウィーン文化史、たとえばその演劇史を論じる際にも、不可欠の要素であることを指摘しておかなければならない。十九世紀後半、ウィーンの演劇界では、ネストロイ (Johann Nestroy) やアンツェングルーバー (Ludwig Anzengruber) に代表される、風刺の利いた、辛口の社会劇が次第に姿を消し、それに代わって、オペレッタを中心とする、単純明快なあらすじを持ち、スペクタクルと感傷に満ちた華やかな舞台が人気を集めるようになっていた<sup>(61)</sup>。そして、この趣味の変化の背景に、「現実逃避」の要素が存在したことは否定できない。

このように、たとえば「逃避」という視点から、同時代のさまざまな文化的現象との関わりにおいて祝祭の意味を読み直すことが可能になるだろう。そして、十九世紀文化史のコンテクストの中で再検討されることによって、「祝祭」というテーマは、市民階層の社会や日常の構造に、より多くの光を当てる可能性を持っているのである。

(本稿は、1995年度文部省科学研究費補助金《奨励研究A・課題番号07710263》による成果の一部である)

#### 注

- (1) M・バフチーン著、川端香男里訳、『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』、せりか書房、1973年、15頁
- (2) 啓蒙思想家の祝祭論を代表するのは、Jean-Jacques Rousseau の理論である。たとえば、かれは、祝祭と劇場を比較した上で、劇場がひとつの「不平等の場」を形成し、極めて受動的な文化制度として機能するのにたいし、祝祭とは、共同体の本質を極めて劇的、創造的に実現するものだと説明した。Lettre à Mr. d'

- Alembert sur les spectacles, citè en: M. Fuchs (ed.), *Textes littéraires français*, Lille-Genève 1948, pp. 168ff.
- (3) アナール学派の代表的祝祭研究として、E. Le Roy Ladurie, *Le Carnaval de Romans: de la Chandeleur au mercredi des Cendres 1579-1580*, Paris 1979; J. Jacquot, E. Kuonigson (éds.), *Les fêtes de la Renaissance*, vol. I-III, Paris 1975-1977 などがある。特定の祝祭についていうなら、とりわけ、フランス革命祭に関する研究層は極めて厚い。代表的なものとしては、M. Vovelle, *Les métamorphoses de la fête en Provence de 1750 à 1820*, Paris 1976, M. Ozouf, *La fête révolutionnaire 1789-1799*, Paris 1976 (邦訳: 立川孝一訳『革命祭典』、岩波書店、1988年) 等が挙げられる。
- (4) 近代市民階層という新しいテーマの研究に先鞭をつけたのが、J. Kocka と L. Gall がそれぞれビーレフェルト大学とフランクフルト大学で展開した研究プロジェクトであった。その成果として、以下のような文献が挙げられる。 J. Kocka (Hrsg.), *Bürger und Bürgerlichkeit im 19. Jahrhundert*, Göttingen 1987; Ders. (Hrsg.), *Bürgertum im 19. Jahrhundert: Deutschland im europäischen Vergleich*, 3 Bde., München 1988; L. Gall, *Bürgertum in Deutschland*, Berlin 1989; Ders. (Hrsg.), *Stadt und Bürgertum im 19. Jahrhundert*, München 1990; Ders. (Hrsg.), *Von der ständischen zur bürgerlichen Gesellschaft*, München 1993.
- (5) J. Kocka, Bürgertum und bürgerliche Gesellschaft im 19. Jahrhundert: Europäische Entwicklungen und deutsche Eigenarten, in: *Bürgertum im 19. Jahrhundert...*, S. 11f.
- (6) M. Hettling / P. Nolte, Bürgerliche Feste als symbolische Politik im 19. Jahrhundert, in: Dies. (Hrsg.), *Bürgerliche Feste: Symbolische Formen politischen Handelns im 19. Jahrhundert*, Göttingen 1993, S. 7 ff.
- (7) K. Tenfelde, Adventus: Zur Historischen Ikonologie des Festzugs, in: *Historische Zeitschrift* 235 (1982), S.45ff.; Derselbe, Adventus: Die fürstliche Einholung als städtische Fest, in: P. Hugger (Hrsg.), *Stadt und Fest: Zur Geschichte und Gegenwart europäischer Festkultur*, Stuttgart 1987, S.45ff. なお、これらは、Tenfelde が1981年にミュンヘン大学に提出した教授資格請求論文の一部である。
- (8) Tenfelde, Adventus: Zur Historischen Ikonologie..., S.51f.
- (9) 774年はローマ教皇の要請で北イタリアに遠征し、勝利を収めた後の凱進行進、

- 800年は西ローマ帝国皇帝として戴冠を受けるためのローマ入城であった。A. a.O., S.48f. Vgl. E. Orth, Die Kaiserkrönung Karls des Großen in Rom, In:Uwe Schultz (Hrsg.), *Das Fest: Eine Kulturgeschichte von der Antike bis zur Gegenwart*, München 1988, S. 59ff.
- (10) Tenfelde, a.a.O., S. 74
- (11) A.a.O., S. 63f. S.a. D. Düding, Das deutsche Nationalfest von 1814: Matrix der deutschen Nationalfeste im 19. Jahrhundert; P. Brandt, Das studentische Wartburgfest vom 18. / 19. Oktober 1817; C. Foerster, Das Hambacher Fest 1832: Volksfest und Nationalfest einer oppositionellen Massenbewegung, alle in: Düding u.a. (Hrsg.), *Öffentliche Festkultur: Politische Feste in Deutschland von der Aufklärung bis zum Ersten Weltkrieg*, Hamburg 1988
- (12) 啓蒙思想の広がりとともにヨーロッパ各地に成立したクラブや結社は、既存の血縁・地縁関係の中にアイデンティティを求め得なかった近代市民階層に、新しいタイプの社会的結合の可能性を提供した。特に、かれらの政治活動において、これらの団体は極めて重要な役割を果たした。Vgl. U. Im Hof, *Das gesellige Jahrhundert: Gesellschaft im Zeitalter der Aufklärung*, München 1982; C. Eisenberg, Arbeiter, Bürger und der "bürgerliche Verein" 1820-1870: Deutschland und England im Vergleich, in: Kocka (Hrsg.), *Bürgertum im 19. Jahrhundert ...*, Bd.3, S. 48ff.
- (13) K. Obermann, Die Deutsche Einheitsbewegung und die Schillerfeier 1859, in: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft 3 (1959), S. 705ff., R. Noltenius, Schiller als Führer und Heiland: Das Schillerfest 1859 als nationaler Traum von der Geburt des zweiten deutschen Kaiserreichs, in: Düding u.a. (Hrsg.), a.a.O., S. 237ff.
- (14) Hettling / Nolte, a.a.O., S. 18
- (15) Tenfelde, a.a.O., S.68ff. S.a. P.C. Witt, Die Gründung des Deutschen Reichs von 1871 oder dreimal Kaiserfest, in: U. Schltz (Hrsg.), a.a. O., S. 306ff.
- (16) Tenfelde は、この祝祭史の流れをさらに二十世紀のメーデーへとつなげて考察している。Tenfelde, a.a.O., S. 76ff.
- (17) Vgl. R. Hoffmann, Bürgeliche Kommunikationsstrategien zu Beginn der liberalen Ära: Das Beispiel Salzburg, in: E. Bruckmüller, H. Stekl

- u.a. (Hrsg.), *Durch Arbeit, Besitz, Wissen und Gerechtigkeit (Bürgertum in der Habsburgermonarchie Bd. 2)*, Wien 1992, S.322f.
- (18) J. Mikoletzky, Bürgerliche Schillerrezeption im Wandel: Österreichische Schillerfeiern 1859-1905, in: H. Haas / H. Stekl (Hrsg.), *Bürgerliche Selbstdarstellung: Städtebau, Architektur, Denkmäler* (Bürgertum in der Habsburgermonarchie Bd. 4), Wien 1995, S. 165ff.
- (19) Hoffmann, a.a.O., S. 328f. それまでドイツ民族主義の枠組みの中で祝われてきたシラー祭が、オーストリア地域において、その後、いかにその性格を変化させていったかについては、Mikoletzky, a.a.O., S. 170ff. を参照。
- (20) W. Hartmann, *Der historische Festzug: Seine Entstehung und Entwicklung im 19. und 20. Jahrhundert*, München 1976
- (21) Lokal-Anzeiger der "Presse", 15. 1. 1879, S. 9
- (22) Allgemeines Verwaltungsarchiv Wien, Kriegsarchiv, Index für 1879, Weisungen an das Kgr. Ungarn
- (23) Der Festzug aus Anlaß der silbernen Hochzeit 27. 4. 1879, in: *Der Kaiser und Wien. Ansprachen und Handschreiben Sr. Majestät Kaiser Franz Josefs I.*, Wien 1910, S. 103
- (24) Wiener Communal-Kalender und Städtisches Jahrbuch 1880, 8. Jg. (N.F.) Wien 1880, S. 317f.
- (25) Alfred Freiherr von Berger, *Buch der Heimat*, Bd. 2, Berlin 1910, S.22
- (26) Robert Musil, *Der Mann ohne Eigenschaft* (Sonderausgabe) Bd.2, Hamburg 1992, S.83ff. ムジルの描いた皇帝像については、S. トゥールミン、A. ジャニク著、藤村龍雄訳、『ヴィトゲンシュタインのウィーン』TBSブリタニカ、1978年、44-46頁も参照のこと。
- (27) Vorwort für: *Der Kaiser und Wien ...*, S.4
- (28) この画期的な都市計画は、1857年、新聞紙上に発表された皇帝の親書によって開始された。Vgl. E. Springer, *Geschichte und Kulturleben der Wiener Ringstraße*, Wien 1979, S. 88ff.
- (29) Vgl. H. Spiel, *Glanz und Untergang: Wien 1866 bis 1938*, München 1987 (D.T.V. Ausgabe), S. 18f.
- (30) ハプスブルク帝国における近代市民階層台頭の特徴として、かれらが、あくまで中央政府の保護のもとで、とりわけマリア・テレジアとヨーゼフ二世による優

遇を通じて社会的、経済的成功を実現したことが、すでに指摘されている。Vgl. E. Bruckmüller, Ein Begrenzter Aufstieg: Das österreichische Bürgertum zwischen Biedermeier und Liberalismus, in: H. Rumppler (Hrsg.), *Innere Staatsbildung und gesellschaftliche Modernisierung in Österreich und Deutschland 1867/71 bis 1914*, München 1991, S. 69ff.

- (31) この祝祭に関する研究としては、R. Kassal-Mikula, Der Festzug, in: *Traum und Wirklichkeit: Wien 1870-1930*, Wien 1985, S.40ff., M. Hecher, Hans Makart und der Wiener Festzug von 1879, Phil. Diss., Wien 1986
- (32) Wiener Communal-Kalender... 1880, S. 318
- (33) Hartmann, a.a.O., S. 32
- (34) Schlußbericht der Festkommission des Gemeinderates über die Festlichkeiten der Reichshaupt- und Residenzstadt Wien aus Anlaß der silbernen Hochzeit Ihrer Majestäten des Kaisers und Kaiserin: Dem Gemeinderathe vom Referenten Wilhelm Ritter von Wiener in der Sitzung vom 6. Mai 1879 erstattet, Wien 1879 S. 5
- (35) Wiener Communal-Kalender ... 1880, S. 322
- (36) ebd.
- (37) Lokal-Anzeiger der "Presse", 22. 1. 1879, S. 9
- (38) Makartのほか、建築家 Otto Wagnerならびに Andreas Streit、画家 Friedrich Schilcher、彫刻家 Karl Kundmannが委員会に参加することになった。
- (39) Neue Freie Presse, 1. 3. 1879, Abendblatt S. 1
- (40) このユニフォームについて、ウィーン市当局が発行した祝祭の公式プログラムは、「16世紀初頭は、ドイツ文化があらゆる局面で繁栄をみた偉大な時代であった。中世の因習は打ち破られ、新しい創造と新しい行為への衝動がほとぼしっていた。それは人々の外装にまで影響を及ぼし、中世の不格好な装束はついに脱ぎ捨てられることになった…」と説明している。ドイツ民族主義が、ハプスブルク帝国における国家のアイデンティティとしての意味を失った後も、祝祭文化の中になおその影響を残していたことは、ここにも明らかである。 *Der Huldigungs-Festzug der Stadt Wien zur Feier der Silbernen Hochzeit Ihrer Majestäten Kaiser Franz Joseph I. und Kaiserin Elisabeth 27. April 1879* (Publication des Gemeinderathes der Stadt Wien 1881), S. 35
- (41) A. Baudrexel, *Das Kaiserfest: Illustrierte Erinnerungsblätter an die*

- Feier der silbernen Hochzeit des Allerhöchsten Kaiserpaares*, Wien 1879, S. 42ff. S.a. R. v. Ambros, *Festzug der Silbernen Hochzeit des Kaiserpaares Franz Josef u. Kaiserin Elisabeth*, Wien o.J. (1879?)
- (42) マカルトについては、E. Pirchan, *Hans Makart*, Wien 1954; G. Frodl, *Hans Makart: Monographie und Werkverzeichnis*, Wien 1974
- (43) Vgl. Pirchan, a.a.O., S. 32ff.; F. Hennings, *Ringstraßensymphonie*, Wien 1963, S. 101f.
- (44) A. Wilbrandt, *Erinnerungen*, Stuttgart u. Berlin 1905, S. 123
- (45) リングシュトラッセの建築様式については、拙稿「ウィーンの都市拡張計画とその文化史的背景—歴史主義建築再考」(『西洋史論叢』第十一号、1989年、58-71頁)において詳述した。
- (46) R. Wagner-Rieger, Vom Klassizismus bis zur Secession, in: *Geschichte der Stadt Wien, Bd. VII, Geschichte der bildenden Kunst in Wien; Geschichte der Architektur in Wien*, Wien 1973, S. 134
- (47) Vgl. U. Muhlack, Bildung zwischen Neuhumanismus und Historismus, in: R. Koselleck (Hrsg.), *Bildungsbürgertum im 19. Jahrhundert*, Teil II, Stuttgart 1985, S. 80ff.
- (48) W. J. Mommsen, *Die Geschichtswissenschaft jenseits des Historismus*, Düsseldorf 1971, S. 6
- (49) C. Gurlitt, *Die Deutsche Kunst seit 1800. Ihre Zeit und Taten*, Berlin 1899, S. 483. とりわけ、ドイツでは、帝国建国後、市民たちの間に「国家統一の完成者」としての自意識が強まっていった。Vgl. L. v. Kobell, *Unter den vier ersten Königen Bayerns: Nach Briefen und eigenen Erinnerungen*, Bd. 2, München 1894, S. 141, zitiert in: Hartmann, a.a.O., S. 8
- (50) Hartmann, a.a.O., S. 8 たとえばウィーンでは、1883年、トルコ軍撃退三百年祭が盛大に祝された。Neue Freie Presse, 11. 9. 1883, Abendblatt, S. 1-3
- (51) たとえば、S. トゥールミン、A. ジャニク、前掲書、47-52頁; W.M. ジョンストン著、井上修一他訳、『ウィーン精神—ハープスブルク帝国の思想と社会 1848-1938』、みすず書房、1986年、171-250頁を参照。
- (52) Vgl. P. Assion, Historische Festzüge: Untersuchungen zur Vermittlung eines bürgerlichen Geschichtsbildes, in: *Forschungen und Berichte in Baden-Württemberg 1974-1977*, Stuttgart 1977, S. 70f.
- (53) Hartmann, a.a.O., S. 8f. Hartmann は、十九世紀の祝祭に関する研究史



の最大の問題点として、このことを指摘した上で、十九世紀から二十世紀にかけての数多くの祝祭行列の事例に即して綿密な分析を行った。しかし、その後、彼の視点を受け継ぐ形での祝祭研究はほとんど出ていない。Vgl. Hecher, a.a.O., S. 2

- (54) 祝祭行列はもともと4月25日に予定されていたが、悪天候のため二日後に延期された。Wiener Communal-Kalender ... 1880, S. 327
- (55) Neue Freie Presse, 28. 4. 1879. S. 2f.
- (56) Lokal-Anzeiger der "Presse", 30. 4. 1879
- (57) 38頁参照。
- (58) 38頁参照。
- (59) Hettling, u. Nolte, a.a.O., S. 18
- (60) Le Roy Ladurie, a.a.O. (Deutsche Ausgabe: *Karneval in Romans. Von Lichtmeß bis Aschermittwoch 1579-1580*, Stuttgart 1982, S. 128ff.)
- (61) Vgl. F. Hadamowsky, *Wien. Theatergeschichte*, Wien 1988, S. 372ff., S. 615 ff. S. a. V. Klotz, *Bürgerliches Lachtheater: Komödie, Posse, Schwank, Operette*, München 1980